

# コラージュ作品における感情状態の表現について

著者名(日)	荒井 真太郎
雑誌名	研究紀要
巻	5
ページ	155-170
発行年	2004-03-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000217/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000217/</a>

# コラージュ作品における感情状態の表現について

## The Expression of Emotional States

### — In The Works of Collage —

荒 井 真太郎\*

Shintaro ARAI

#### 抄 録

感情状態とコラージュ作品における表現の関係について検討するため、28名の調査対象者のうちで、2回のセッションでの感情状態の変化の大きかった場合ごとにコラージュ作品、多面的感情状態測定尺度の得点、さらにコラージュ作品に対する印象評定に関して事例的に分析を行った。

その結果、①作品の制作者の感情状態の変化に沿うように、コラージュ作品の印象が変化する場合、②逆方向に印象が変化する場合、③感情状態が反映されていない場合が明らかになった。感情の種類によっては、コラージュによるイメージの表現との対応関係が推測されやすい結果が明らかとなった。

## 1. 問題と目的

### 1. 1 はじめに

心理学的な感情研究のレベルとして、Scott (1980)<sup>1)</sup>は、①人間によって経験される主観的な感じや情緒、②他の個体に自分の感情を伝達する社会的な信号としての感情の表現、③感情が生じるのに伴う生理学的な変化、の3つを挙げている。①～③のどのレベルであっても一般的に理解しやすい感情(例えば、空腹時に食物にありついた時のうれしさなど)から、極めて個人的な文脈の中で生じる感情や、漠然として他人に伝えにくい感情、さらに自分自身でも理解しづらい感情もある。

心理療法においては、クライアントの表現するイメージを通して、治療者の共感が促される。共感には、クライアントのその時の感情状態を理解するという側面があるが、それがしばしば容易ではないのは、感情状態が極めて個人的なものであるという理由が考えられる。個人的な感情状態を理解する媒介としてイメージが極めて重要になるのであり、感情状態に焦点を当てて、イメージの表現に関わるというアプローチが必要であろう。

言語自体も、精巧で膨大なイメージの体系であり、ある言語を身につけることで感情を表現する手段は飛躍的に拡大するが、言葉を操る能力には個人差もあり、他の感情表現の形式が必要になる場合

---

\* 関西国際大学人間学部

も多い。例えば、言葉では表せない感情であっても、視覚的なイメージを媒介として感情がうまく伝わるということがある。心理療法の場で描画による表現や箱庭の作成によって、言語的には理解されないままに問題が改善し、心の病が治癒することがあるという事態も、言語化されないレベルでの感情表現やコミュニケーションが起きている可能性を示唆している。

本研究では、質問紙尺度によって言語的に表された感情状態と、視覚的なイメージを対比させ、両者の関係を検討することによって、感情状態の表現、さらには共感という感情面でのコミュニケーションについての理解を深めようとするものである。

## 1. 2 感情状態の測定尺度と感情状態の変化

主観的な感情のレベルに焦点を当てる場合、言語による内観報告を取り上げる形式の研究が多い。自由記述の形式では、回答者の負担が大きく、回答に対する動機付けや言語能力の要因も大きく影響するため、感情状態を表した項目を回答者がチェックする形式の質問紙尺度を使用する研究が主流である。多数の感情状態を表す項目に関して得られた回答を基に、感情状態の基本的な因子を抽出し、因子構造を分析する試みがなされてきている(Lorr & Shea, 1979<sup>2)</sup>; Watson & Tellegen, 1985<sup>3)</sup>; Gotlib & Mayer; 1986<sup>4)</sup>)。感情状態の因子構造に関する研究でも、感情の発達の側面に焦点を当てた研究(Zevon & Tellegen, 1982<sup>5)</sup>; Rassel & Ridgeway, 1983<sup>6)</sup>)や、アメリカ人と日本人の感情の比較という文化的側面に焦点を当てた研究(Watson, Clark, & Tellegen, 1984)<sup>7)</sup>などの方面に分化している。これらの研究において共通する点として、快-不快の次元に関わる因子が抽出されており、研究によっては、覚醒水準の次元に関する因子や活動性の次元に関わる因子などが抽出されている。Plutchic (1989)<sup>8)</sup>のレビューによると、様々な研究によっては、それぞれ3~12個の因子を抽出しているものがあり、感情状態を測定するための尺度の標準化は困難である状況を物語っている。

日本では、不安や抑うつなど単一の感情に関する概念を質問紙尺度によって測定しようとする試みは多くなされているが、多面的な感情状態を一度に測定するための尺度の作成はこれまでのところあまり試みられていない。寺崎・岸本・古賀(1992)<sup>9)</sup>は、761語の感情状態を表す言葉を収集し、4回の質問紙調査を繰り返すことによって、8因子80項目からなる多面的感情状態尺度を作成した(表1)。寺崎らによって抽出された抑うつ・不安、敵意、倦怠、活動的快、非活動的快、親和、集中、驚愕の因子は、欧米で行われた研究ともある程度一致しており、現在の日本語で感情状態を表す語全体の基本的な因子構造を表していると考えられる。

また、質問紙尺度を利用した感情状態の変化を捉えようとした試みとして、Wessman & Ricks (1966)<sup>10)</sup>は、独自に作成した個人的感情尺度(The Personal Feeling Scales)を使用して、6週間にわたり18名の学生に毎晩回答してもらうという形の縦断的研究を行った。Wessmanらは高揚した状態と抑うつ状態の比較、気分の安定している学生と気分の変動が激しい学生を比較しつつ、個性記述的に感情の問題を明らかにしている。

このように、質問紙尺度を用いて、感情状態に関する個人内の変化という点に着目することで、感

表1 多面的感情状態尺度項目（寺崎ほか，1992）

①活動的快	②非活動的快	③親和	④抑うつ・不安
活気のある 元気いっぱい 気力に満ちた はつらつとした 快調な 気持ちの良い 快適な 機嫌のよい 陽気な さわやかな	のんびりした ゆっくりした のどかな おっとりした のんきな やわらいだ 平静な 気長な ゆったりした ゆるんだ	いとおしい 愛らしい 恋しい すてきな 好きな かれんな あこがれた うっとりした かわいらしい 情け深い	気掛かりな 引け目を感じている 不安な 悩んでいる 自信がない くよくよした 悲観した 沈んだ ふさぎこんだ もの悲しい
⑤倦怠	⑥敵意	⑦驚愕	⑧集中
つまらない 不機嫌な ばからしい 疲れた 退屈な だるい 無気力な ぼんやりした ぼやぼやした 無関心な	敵意のある 攻撃的な 憎らしい 挑戦的な うらんだ むっとした かっとした おこった 気分を害した むしゃくしゃした	びっくりした びくりとした 驚いた 動揺した はっとした ぞくぞくした おろおろした どきどきした うろたえた ぼうぜんとした	慎重な ていねいな 丁重な 思慮深い 用心深い 懸命な 注意深い 真剣な 鋭敏な 緊張した

情という主観的な体験を客観化する契機が生じると考えられる。そこで本研究では、感情状態測定尺度によって個人内の変化を捉えるということを目的の1つとする。

### 1. 3 視覚的イメージ（コラージュ）による感情状態の表現

コラージュとは、既存の写真や、イラストなどを自由に切り抜くなどしてそれらを画材に貼り付けて新たな作品として再構成するという芸術作品の1つのジャンルであるが、臨床心理学においては、芸術療法の中の一つの技法として位置づけられる。コラージュについては、治療的な意味が論じられており（中井，1993）<sup>11)</sup>、心理療法の場におけるコミュニケーションの媒介として優れた技法であると考えられている。

コラージュに関する実証的研究では、診断的側面について、Lerner (1977)<sup>12)</sup>が精神科入院患者群と正常群との比較を行っている。Lernerによると、前者は、①切り抜き数が少ないこと、②全体のバランスがないこと、③中心となるテーマがないこと、④人の写真やイメージの使用が少なく、逆に動物のものが多く、などの特徴を見いだしている。また、Lerner (1979)<sup>13)</sup>は、患者群と統制群のコラージュ作品を弁別できないという結果を示したが、その一方で、コラージュによって心理状態を推論することは可能であるとも述べている。

視覚的イメージによる感情状態の表現として、コラージュを取り上げる理由としては、中井が言うように、コラージュの制作過程で写真などのパーツを取り扱う際、「社会的に通用する（成人的な）意味」による拘束性が、箱庭や風景構成法よりも少ないということが挙げられる。社会的に通用する意味に拘束されないため、制作においては、より感覚や感情的側面が表現されやすいと考えられる。その他の理由としては、パーツである写真やイラストの選択には、「好き嫌い」という感情の一つ

の次元が大きく関わっていること、パーツの色合いなどが感情状態を反映する可能性があることなどが挙げられる。

## 1. 4 本研究の目的

本研究では、一般学生を対象とした基礎研究として、感情状態測定尺度に対する回答と、コラージュによる表現との関連を検討する。調査においては、個人内における感情状態の変化を捉えるため、複数回にわたり感情状態の測定とコラージュの制作を行い、その変化を基に感情状態とコラージュによる表現との関わり分析を試みる。

## 2. 方 法

2. 1 調査対象：大学生・大学院生 28 名（女性 14 名，男性 14 名；平均年齢：21.2 歳；標準偏差：1.54）。

### 2. 2 材料

- ①多面的感情状態測定尺度（寺崎他，1992）：8 因子で各因子につき 10 項目ずつの計 80 項目からなる 4 件法の質問紙尺度。
- ②コラージュ制作：コラージュのパーツの材料をすべて統一するため，写真，イラスト等のカラーコピーを用い，コラージュ・ボックス法（森谷，1993）<sup>14)</sup>を採用した。カラーコピーは 90 枚程度用意した。内容は，人間，動物，植物，絵画，イラスト，自然の風景，乗り物，武器など多種にわたる。写真やイラストの他に，色紙，クレパス，スティック糊，鋏を用意した。画用紙は 4 つ切りと 8 つ切りの 2 種類を用意した。

### 2. 3 手続き

- ①1 対 1 の面接方式で，多面的感情状態尺度に回答を求めた後，コラージュの制作を施行した。コラージュ制作の教示として，「大小 2 種類の画用紙のどちらか一方を使用すること」，「写真，イラストなどを好きなように選んで画用紙に貼ること」，「クレパスを使ってもよいこと」，「鋏を使用して写真などを切ってもよく，また切らなくてもよいこと」，を伝えた。  
制作のプロセスとして，選択したパーツ，画用紙に貼り付ける順番，制作に要した時間を記録し，制作終了後には，作品のテーマ，感想についてインタビューにより回答を求めた。  
以上の手続きを，同一の調査対象者に対して，3～5 週間後に再び行った。2 回目の調査の終了時には，制作者の 2 枚の作品を制作者自身が見比べて，感想などについてインタビューを行った。
- ②28 名の調査対象者のうちで，1 回目と 2 回目のセッションで感情状態の変化が大きかった 7 名（上

## コラージュ作品における感情状態の表現について

位 25%) 分の計 14 枚のコラージュ作品を選び、21.5% に縮小したカラーコピーを用いて、印象評定を行った。印象評定に用いた尺度は、多面的感情状態測定尺度の 8 因子 80 項目中より、各因子につき 5 項目ずつ選び、計 40 項目からなる 4 件法の評定尺度とした (表 2)。

表 2 コラージュ作品の評定項目

①活動的快	②非活動的快	③親和	④抑うつ・不安
活気のある 元気いっぱい 気力に満ちた はつらつとした 気持ちの良い	のんびりした ゆっくりした のどかな のんきな やわらいだ	いとおしい 愛らしい すてきな 好きな かわいらしい	気掛かりな 不安な 悲観した 沈んだ もの悲しい
⑤倦怠	⑥敵意	⑦驚愕	⑧集中
つまらない 不機嫌な ばからしい 退屈な ぼんやりした	敵意のある 攻撃的な 憎らしい 挑戦的な 気分を害した	びっくりした 驚いた 動揺した ぞくぞくした どきどきした	慎重な ていねいな 思慮深い 用心深い 懸命な

制作者 1 名につき 2 枚のコラージュ作品があり、計 7 名分のコラージュ作品について、制作者ごとに分けて印象評定を行った。それぞれにつき、大学生 8 名～16 名が印象評定を行った。

## 3. 結果および考察

### 3. 1 多面的感情状態測定尺度の得点分布

1 回目と 2 回目のセッション時の多面的感情状態測定尺度の各因子に関する項目得点の平均値と標準偏差を表 3 に示す。

表 3 多面的感情状態尺度の因子得点の平均値と標準偏差

		第 1 セッション	第 2 セッション	
活動的快	Mean	24.39	24.43	p < .05
	S D	5.11	5.99	
非活動的快	Mean	28.00	25.00	
	S D	4.61	5.16	
親和	Mean	18.71	19.75	
	S D	4.03	5.72	
抑うつ・不安	Mean	20.46	21.79	
	S D	5.18	6.81	
倦怠	Mean	19.68	19.21	
	S D	3.44	3.20	
敵意	Mean	13.61	15.18	
	S D	3.96	4.88	
驚愕	Mean	17.64	17.61	
	S D	3.90	4.51	
集中	Mean	24.21	24.71	
	S D	3.97	3.80	

1回目と2回目での平均値の変化について、ノンパラメトリックのWalshテストによって検討したところ、非活動的快因子の得点のみで有意差が見られた。

調査対象者ごとに、8個の因子に関する項目得点について、1回目と2回目のセッション時での得点差を算出し、その絶対値を合計することで、個人内の感情状態の変化の大きさを示す指標とした。この合計点をD得点とした。D得点の分布を図1に示す。このD得点をもとに、感情状態の変化の大きい7名(全体の25%)を選択し、コラージュ作品の分析を行った。

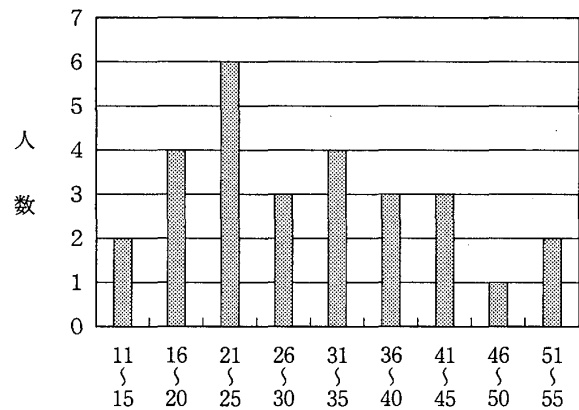


図1 D得点の分布

### 3. 2 コラージュ作品と感情状態の対応

感情状態の変化が大きかった7名について、D得点の大きい順に、コラージュ作品の変化を中心に検討を行った。

【ケース1】女性 26歳 D得点：52点

①因子ごとの項目得点の変化を表4に示す。

1回目と2回目の項目得点の変化の大きさについて、全体の上位25%以内にあたる場合を目安として「顕著な変化があった」と記述する(ケース2以降も同様)。顕著な変化があったのは、活動的快、

表4 感情状態尺度の変化

ケース1	活動的快 -6*	非活動的快 -4	親和 -8*	抑うつ・不安 +15*	倦怠 +3	敵意 +1	驚愕 +13*	集中 -2
ケース2	活動的快 -4	非活動的快 -9*	親和 +3	抑うつ・不安 +6*	倦怠 0	敵意 +18*	驚愕 -4	集中 +8*
ケース3	活動的快 +20*	非活動的快 +6	親和 +8*	抑うつ・不安 -5	倦怠 -6*	敵意 0	驚愕 +1	集中 +3
ケース4	活動的快 0	非活動的快 -6	親和 -1	抑うつ・不安 +9*	倦怠 -2	敵意 +3	驚愕 -14*	集中 -8*
ケース5	活動的快 -3	非活動的快 -14*	親和 -6*	抑うつ・不安 0	倦怠 -6*	敵意 +4	驚愕 +7*	集中 -1
ケース6	活動的快 0	非活動的快 -6	親和 -1	抑うつ・不安 +3	倦怠 0	敵意 +19*	驚愕 -8*	集中 -3
ケース7	活動的快 -5	非活動的快 -8*	親和 -3	抑うつ・不安 +11*	倦怠 +2	敵意 +7*	驚愕 -3	集中 +1

※は、得点の変化の大きさが被調査者28名中で上位25%以内のものである。

(注：1回目の項目得点を基準として2回目の得点が高くなったときは+、低下したとは-とした。)

親和、抑うつ・不安、驚愕因子に関わる項目得点であった。

② 2回にわたって制作されたコラージュ作品の概要は以下の通りである。

＜コラージュ作品（1回目）＞

- ・使用したパーツ（写真，イラスト等。画用紙に貼り付けた順に記す。）…枯れ木，工場の煙突から出る煙，ベッド，髑髏，海に浮かぶ小島，トランク，二人の老婆，2羽の鳥，灰皿，カメラ
- ・所用時間：36分55秒
- ・テーマ（制作者に対するインタビューによる）：「旅かもしれない。トランクとか，カメラが旅の象徴。」

＜コラージュ作品（2回目）＞

- ・使用したパーツ…赤ちゃんのイラスト，道の風景，2羽の鳥，バラの花，中年男性，高校生の応援風景
- ・所用時間：39分52秒
- ・テーマ：「自分の中で元気が出てくる，力が湧いてくる，インスピレーションが湧くのを選んで，切り取ることでもっと Vivid になるように切った。」

＜2枚の作品を比較した感想＞

「1回目の作品は，嫌ではないが，不気味で怖い」と述べ，2回目の作品を制作中には，「用意してあった写真が全て怖く感じた」，「1回目に使用した髑髏やベッドの写真は怖くて使う気がしなかった」

③ 2枚の作品に対する印象評定の平均値とT検定の結果を表5に示す(ケース2以下も同様。)。平均値に有意差が認められたのは，非活動的快，抑うつ・不安，敵意に関わる項目得点である。2回目の作品は，1回目に比べて，非活動的快が高く，抑うつ・不安と敵意は低い印象を与えている。この結果は，コラージュ制作者の感情状態の変化と概ね逆方向の変化を示しているものである。制作者の言うように，2回目では，「元気がでてくる」ようなイメージを表現したために，作品の与える印象は，感情状態の変化とむしろ逆になったと考えられる。

【ケース2】男性 25歳 D得点：52点

①感情状態尺度において顕著な変化があったのは，非活動的快，抑うつ・不安，敵意，集中因子に関わる項目得点である。集中因子の項目得点の上昇は，28名中最大であった。

② 2回にわたって制作されたコラージュ作品の概要は以下の通りである。

＜コラージュ作品（1回目）＞

- ・使用したパーツ…イナゴ，恐竜，コンクリートの壁，猫，二人の老婆，クマのイラスト，靴
- ・所用時間：39分12秒
- ・テーマ：「猫が何かを捕まえようとしているのかな，でやりました。最初は，この辺のお婆さ



表5 コラージュ作品に対する印象認定の平均値（標準偏差）とT検定

ケース1 N=16 T値	活動的快		非活動的快		親和		抑うつ・不安		倦怠		敵意		驚愕		集中	
	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2
	8.94(3.57)	11.13(3.98)	6.88(2.00)	11.31(4.38)	7.56(3.29)	9.94(4.93)	15.75(4.24)	12.69(2.80)	10.50(2.13)	11.19(3.41)	14.25(3.87)	10.13(3.65)	12.94(3.91)	10.13(3.98)	11.19(2.76)	10.69(3.26)
T値	-1.64		-3.69**		-1.60		2.41*		- .68		3.10**		2.02		.47	
ケース2 N=13 T値	活動的快		非活動的快		親和		抑うつ・不安		倦怠		敵意		驚愕		集中	
	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2
	12.77(2.98)	9.15(2.04)	11.85(4.47)	11.54(4.12)	12.15(2.97)	9.77(2.74)	10.54(2.73)	12.54(2.90)	9.69(1.97)	11.15(2.61)	11.00(3.61)	10.54(4.22)	11.00(3.49)	12.46(2.99)	11.31(2.25)	12.00(2.52)
T値	3.62**		.18		2.13*		-1.81		-1.61		.30		-1.15		-.74	
ケース3 N=12 T値	活動的快		非活動的快		親和		抑うつ・不安		倦怠		敵意		驚愕		集中	
	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2
	13.33(3.28)	14.67(3.26)	8.50(2.75)	9.08(3.15)	10.50(3.92)	9.83(3.88)	10.25(2.90)	7.83(2.59)	8.75(2.38)	7.75(2.60)	10.17(3.35)	9.33(2.67)	10.58(3.15)	9.92(4.01)	11.83(3.64)	9.75(3.62)
T値	-1.00		-.48		.42		2.16*		.98		.67		.45		1.41	
ケース4 N=15 T値	活動的快		非活動的快		親和		抑うつ・不安		倦怠		敵意		驚愕		集中	
	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2
	8.80(3.30)	11.80(2.34)	8.33(3.42)	12.60(4.41)	8.33(3.66)	13.20(4.25)	13.53(3.27)	11.53(4.09)	9.40(2.10)	8.33(2.29)	10.67(3.22)	8.27(2.96)	12.07(3.11)	10.40(3.00)	11.93(3.77)	13.27(3.39)
T値	-2.87**		-2.97**		-3.36**		1.48		1.33		2.12*		1.50		-1.02	
ケース5 N=8 T値	活動的快		非活動的快		親和		抑うつ・不安		倦怠		敵意		驚愕		集中	
	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2
	12.50(2.83)	10.50(2.93)	11.88(3.68)	12.00(3.85)	12.13(3.44)	12.38(4.34)	12.50(3.02)	13.13(2.17)	9.63(2.93)	10.00(1.69)	10.50(2.87)	9.25(3.73)	12.13(3.56)	11.00(2.02)	12.88(2.48)	13.50(1.20)
T値	1.39		-.07		-.13		-.48		-.31		.75		.76		-.64	
ケース6 N=12 T値	活動的快		非活動的快		親和		抑うつ・不安		倦怠		敵意		驚愕		集中	
	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2
	10.33(3.20)	10.67(4.01)	11.75(4.71)	9.50(2.84)	11.00(4.41)	8.92(2.84)	11.17(4.82)	11.33(2.23)	9.50(2.47)	9.25(2.63)	7.00(1.91)	11.42(3.53)	8.42(2.71)	10.42(3.97)	10.33(3.85)	10.00(3.19)
T値	-.23		1.42		1.38		-.11		.24		-3.82**		-1.44		.23	
ケース7 N=8 T値	活動的快		非活動的快		親和		抑うつ・不安		倦怠		敵意		驚愕		集中	
	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2	#1	#2
	8.13(3.27)	9.38(3.78)	8.75(3.99)	14.38(5.10)	9.25(4.53)	11.50(5.21)	12.13(3.14)	8.00(2.98)	8.88(1.55)	7.88(1.81)	8.63(3.11)	5.25(.46)	9.25(3.06)	6.50(2.14)	10.38(3.42)	10.63(4.37)
T値	-.71		-2.46*		-.92		2.70*		1.19		3.03*		2.08		-.13	

\*p<.05 \*\*p<.01

ん（を捕まえる）かなと思ったけど、結局何も捕まえなかったです。」

＜コラージュ作品（2回目）＞

- ・使用したパーツ…黒の色紙（細い線状に切り取って貼り付ける）、緑の色紙（細い線状に切り取って貼り付ける）、水泳選手（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）、イルカ（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）、馬（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）、骸骨（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）、英字雑誌のページ（細い線状に切り取って貼り付ける）、生け花（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）、クラシックカー（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）、スクランブルエッグ（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）、食パン（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）、赤の色紙（アメーバのような不定形の形に切り取り貼り付ける）、オペラ歌手（一部を小さく断片に切り取って貼り付ける）
- ・所用時間：23分42秒
- ・テーマ：「（画用紙）全体が白いのを変えたいな、と思って切ったのを貼っていきました。」

＜2枚の作品を比較した感想＞

「1回目では、顔とか形にとらわれすぎたので、2回目にはとらわれないようにしようと考えた。

2回目の方が殺風景だけど、1回目よりバラバラじゃなくてよかった。」

- ③2枚の作品に対する印象評定を比較した結果、平均値に有意差が認められたのは、活動的快、親和に関わる項目得点である。2回目の作品は、1回目比べて、活動的快と親和がともに低い印象を与えている。制作者の感情状態は、非活動的快、敵意、集中において著しく変化しているが、作品の与える印象は、肯定的な感情が低くなっている点で対応している。制作者の敵意、集中に関する著しい感情状態の変化は、作品において伝わりにくかったと考えられる。

【ケース3】男性 21歳 D得点：49点

- ①感情状態尺度において顕著な変化があったのは、活動的快、親和、倦怠因子に関わる項目得点である。このうち、活動的快因子の得点の上昇、倦怠因子の得点の低下は28名中最大であった。

- ②2回にわたって制作されたコラージュ作品の概要は以下の通りである。

＜コラージュ作品（1回目）＞

- ・使用したパーツ…杉林、イルカ、コスモス、犬、恐竜、鉄道、雪景色、バラの花、ウィンドサーフィン、もみじ、ロック歌手、父と息子、水泳選手、夕焼け、ラクダ、カメラ、機関銃、指輪、ウォークマン、女の子、月と少年、虎、中年男性、食パン、能役者、雑誌中の文字（「のトロフィーです」という部分）、ヨーロッパ中世時代の男性の絵、少女漫画の女性の顔、カエル、競馬場の馬、リス、猿、母と乳児
- ・所用時間：66分33秒
- ・テーマ：「自然に帰れ。自然に逆らっちゃいかん。最初に考えた。」

＜コラージュ作品（2回目）＞

- ・使用したパーツ…コスモス、犬、屋久杉、杉林、イルカ、二人の老婆、シダの葉、カエル、母と乳児、赤ちゃんのイラスト、中年男性、焼酎、もみじ、ゆで卵、虎、ロック歌手、テニス選手、レーシングカー、競馬場の馬、高校生の応援風景、水泳選手
- ・所用時間：29分9秒
- ・テーマ：「スポーツをする人ってということで。僕が泳いでいる。自然の地球で家族に世話になっている」

<2枚の作品を比較した感想>

「2回目の方がすっきりしている。似たような写真を使っている、結局。1回目の方が僕らしいという気がする。一人でいると1回目のこう(いう作品)、前向きになるとこう2回目という感じですね。」

- ③2枚の作品に対する印象評定を比較した結果、平均値に有意差が認められたのは、抑うつ・不安に関わる項目得点である。2回目の作品は、1回目比べて、抑うつ・不安が低い印象を与えている。制作者の感情状態は、活動的快、親和、倦怠において著しく変化しているが、作品の与える印象は、それにほとんど対応していない。使用している写真のパーツが多いこと、同じ写真を多く使っていることなどが、この結果の要因であると考えられる。

【ケース4】男性 21歳 D得点：43点

- ①感情状態尺度において顕著な変化があったのは、抑うつ・不安、驚愕、集中因子に関わる項目得点である。このうち、驚愕、集中因子の項目得点の低下の幅は、28名中最大であった。

- ②2回にわたって制作されたコラージュ作品の概要は以下の通りである。

<コラージュ作品(1回目)>

- ・使用したパーツ…イルカ、杉林、能役者、バッグ、コンクリートの壁、宇宙の星、屋久杉、シダの葉、骸骨、雪景色、パラソル、月夜、ラクダ、犬(これらの写真全てをそれぞれ、2～4枚に切り分けて貼り付ける)
- ・所用時間：74分29秒
- ・テーマ：特になし。

<コラージュ作品(2回目)>

- ・使用したパーツ…果物、バラの花、鉄道、猿、干潟、英字雑誌のページ、藪、蛇、2羽の鳥(これらの写真全てをそれぞれ、4～7枚に切り分けて貼り付ける)
- ・所用時間：64分43秒
- ・テーマ：特になし。

<2枚の作品を比較した感想>

「2回目の方が細かくなった。1回目よりも大きくしようと思っていた。一つ一つのパーツを大きくしようと思っていたが、1回目の方が大きかった。2回目はもとの(写真の)形にこだわらな

いようにしようかな、と。色の使い方が、気分には左右されているのかな。2回目の方が、白黒っぽい。多少沈んでいるかな。」

- ③ 2枚の作品に対する印象評定を比較した結果、平均値に有意差が認められたのは、活動的快、非活動的快、親和、敵意に関わる項目得点である。2回目の作品は、1回目比べて、活動的快、非活動的快、親和がともに高く、敵意が低い印象を与えている。制作者の感情状態は、抑うつ・不安、驚愕、集中において著しく変化しているが、作品の与える印象は、それにほとんど対応していない。ケース1と同様、制作者の感情状態の変化の方向とむしろ逆方向に変化していると言える。制作者自身が2回目の作品の方が「白黒っぽい」と述べているが、印象としてはそれほど明確ではなく、微妙な変化になっている。2回目の形にこだわらない表現が肯定的な印象となって表れたと考えられる。

【ケース5】女性 20歳 D得点：41点

- ① 感情状態尺度において顕著な変化があったのは、非活動的快、親和、倦怠、驚愕因子に関わる項目得点である。このうち倦怠因子の項目得点の低下は、28名中最大であった。

- ② 2回にわたって制作されたコラージュ作品の概要は以下の通りである。

＜コラージュ作品（1回目）＞

- ・使用したパーツ…ベッド、ヨーロッパの城、月、道の風景、アイスクリーム、読書する女子生徒、ケーキ、灰皿（3枚に切り分けて貼り付ける）、ラクダ、シャガールの絵、梅の木、花瓶、コスモス（2枚に切り分けて貼り付ける）、雑誌の文字（「チャルダースの女王」）  
（写真を貼り付けた他に、クレヨンで彩色した）
- ・所用時間：47分44秒
- ・テーマ：「自分の好きなものばかり。」

＜コラージュ作品（2回目）＞

- ・使用したパーツ…外国で建築中のビル、猫、シャガールの絵、道の風景、月夜、人形、競馬場の馬、カメラ、藪（写真を貼り付けた他、クレヨンで彩色した。）
- ・所用時間：39分20秒
- ・テーマ：特になし。

＜2枚の作品を比較した感想＞

「1回目はすごい一生懸命っていうか、色々貼った。1回目は、好きなのを全部貼ろうって、貼っていったけど、2回目はあんまり貼らない方がいいかな、と。」

- ③ 2枚の作品に対する印象評定を比較した結果、どの因子についても平均値に有意差は認められなかった。制作者の感情状態の変化が、作品にはあまり反映していない場合であると言える。

【ケース6】男性 22歳 D得点：40点

①感情状態尺度において顕著な変化があったのは、敵意、驚愕因子に関わる項目得点である。このうち敵意因子の項目得点の上昇は28名中最大であった。

②2回にわたって制作されたコラージュ作品の概要は以下の通りである。

＜コラージュ作品（1回目）＞

- ・使用したパーツ…屋久杉、読書する女子生徒、アトリエ、ラクダ、帽子、夕焼け、コンクリートの壁、海に浮かぶ小島、道の風景、月夜、乳児と母、リス、自動車
- ・所用時間：35分48秒
- ・テーマ：特になし。

＜コラージュ作品（2回目）＞

- ・使用したパーツ…雪景色、イルカ、蛇、猫、虎、水泳選手、工場の煙突から出る煙、灰皿、ネズミ、バラの花、ゴミ捨て場
- ・所用時間：27分18秒
- ・テーマ：「言いにくい。言いたくないテーマがあった。」

＜2枚の作品を比較した感想＞

「随分違うように感じる。2回目の方がシンプル。1回目の時は別にテーマもなく気の向くままにぺたぺたやってたんで、雑然とした感じがする。2回目の方は、確実ではないけど、意味をまずまず（含ませた）。1回目は、あまり活気があるというわけではなく、静かな感じがする。」

③2枚の作品に対する印象評定を比較した結果、平均値に有意差が認められたのは、敵意に関わる項目得点である。2回目の作品は、1回目に比べて、敵意が高い印象を与えている。制作者の感情状態は、敵意、驚愕において著しく変化しているが、作品の与える印象は、それにほぼ一致する形で対応している。感情状態の変化が、わかりやすい形でコラージュに表現されたケースであると言える。

【ケース7】男性 22歳 D得点：40点

①感情状態尺度において顕著な変化があったのは、非活動的快、抑うつ・不安、敵意因子に関わる項目得点である。

②2回にわたって制作されたコラージュ作品の概要は以下の通りである。

＜コラージュ作品（1回目）＞

- ・使用したパーツ…赤色の色紙（2枚）、鉄道、もみじ、月とうさぎのイラスト、シャガールの絵画、夕焼け、スマイルの花、読書する女子生徒（写真を貼り付けた他、朱色のクレヨンで彩色）
- ・所用時間：22分45秒

- ・テーマ：「全体にモノクロっぽいのが多かったし、暖色系のを選んできて、秋っぽい感じにした。」

＜コラージュ作品（2回目）＞

- ・使用したパーツ…山、道のある風景、らくだ、月夜、枯れ木
- ・所用時間：17分13秒
- ・テーマ：「体調を崩した。気分は沈んでいる。前は赤いのでいったので、今度はモノトーン、ブルー系でいこうかな、と。」

＜2枚の作品を比較した感想＞

「前回よりも、自分の気持ちに無理せずにとというか、2回目ということもあってか、楽に作っているような気がした。（1回目と2回目の作品は）自然の物が出てくるのが一緒（共通している）。」

- ③2枚の作品に対する印象評定を比較した結果、平均値に有意差が認められたのは、非活動的快、抑うつ・不安、敵意に関わる項目得点である。2回目の作品は、1回目比べて、非活動的快が高く、抑うつ・不安、敵意がともに低い印象を与えている。制作者の感情状態は、非活動的快、抑うつ・不安、敵意において著しく変化しているが、作品の与える印象は、全て逆方向に変化している。「気分が沈んでいる」と言う2回目の方が、落ち着きのある作品という印象を与えることになったと考えられる。

#### 4. まとめ

28名の被調査者のうちで、2回のセッションでの感情状態の変化の大きかった場合ごとにコラージュ作品と多面的感情状態測定尺度の得点、さらにコラージュ作品に対する印象評定との関係から事例的に分析を行った。

その結果、①作品の制作者の感情状態の変化に沿うように、コラージュ作品の印象が変化する場合、②逆方向に印象が変化する場合、③感情状態が反映されていない場合が明らかになった。

①同方向への変化：

明らかに同方向に変化した場合は、ケース6の敵意に関する感情の変化のみであった。ケース2の活動的快感情に関してもややその傾向が認められた。敵意、活動的快という激しい感情に関しては、感情の変化がそのままに視覚的イメージに表現される場合があると言えよう。しかし、ケース2の敵意感情の変化は、作品には全く反映されておらず、一見分かりにくい形で表現される可能性もある。

②逆方向への変化：

ケース1の抑うつ・不安、ケース7の非活動的快、抑うつ・不安、敵意に関して、制作者の感情状態とコラージュ作品の印象が逆方向に変化していた。ケース4でも、制作者は抑うつ・不安が高まったにも関わらず、肯定的印象を与える作品になっている。特に、抑うつ・不安というネガティブな感情が、高まった時には、それをうち消そうとする逆方向のイメージの表現がなされる場合がある

と言えよう。

③変化が反映されない場合：

ケース3，ケース5では，制作者の感情状態の変化が大きかったにも関わらず，作品の印象はあまり変化していない。感情の種類によっては，視覚的イメージでは伝わりにくいと言えよう。

質問紙尺度によって把握される感情状態は，量的な変化の大小が顕在化する。感情の種類によっては，コラージュによるイメージの表現との対応関係が推測されやすいと言える結果である。今後の課題として，コラージュ作品の変化について感情状態と人格との関係から説明するモデルの構築が必要である。

## 引用文献

- 1) Scott, J.P. : The Function of Emotions in Behavioral Systems : A System Theory Analysis. In Plutchik, R. & Kellerman, H. (Eds.), Emotion, Vol.1 Theories of Emotion, Academic Press, 1980, pp.35 - 56.
- 2) Lorr, M. & Shea, T. M. : "Are Mood States Bipolar?" Journal of Personality Assessment, vol.43, 1979, p.468 - 472
- 3) Watson, D. & Tellegen, A. : "Toward A Consensual Structure of Mood." Psychological Bulletin, vol.98, 1985, p.219 - 235
- 4) Gotlib, I. H. & Mayer, J. P. "Factor Analysis of The Multiple Affect Adjective Checklist." Journal of Personality and Social Psychology, Vol.50, 1986, p.1161 - 1165
- 5) Zevon, M. A. & Tellegen, A. : "The Structure of Mood Change." Journal of Personality and Social Psychology, Vol.43, 1982, p.111 - 122
- 6) Rassel, J. A. & Ridgeway, D. : "Dimension Underlying Children's Emotion Concepts." Developmental Psychology, vol.19, 1983, p.795 - 804
- 7) Watson, D., Clark, L.A., & Tellegen, A. : "Crosscultural Convergence in The Structure of Mood : A Japanese Replication and Comparison With U.S. Findings." Journal of Personality and Social Psychology, Vol.47, 1984, p.127 - 144
- 8) Plutchik, R. : Measuring Emotions and Their Derivatives. In Plutchik, R. & Kellerman, H. (Eds.), Emotion, Vol.4, The Measurement of Emotion, Academic Press, 1989, pp.1 - 35.
- 9) 寺崎正治，岸本陽一，古賀愛人：「多面的感情状態尺度の作成」『心理学研究』，62巻，1992，350 - 356 項
- 10) Wessman, A.E. & Ricks, D.F. : Mood and Personality, Holt, Rinhart and Winston, 1966
- 11) 中井久夫：「コラージュ私見」，森谷寛之，杉浦京子，入江茂，山中康裕編著：『コラージュ療法入門』創元社，1993，137 - 146 項
- 12) Lerner, C.J. : "The Magazine Picture Collage : Development of An Objective Scoring

- System.” The American Journal of Occupational Therapy, Vol.31, 1977, p.156 - 161
- 13) Lerner, C.J. : “The Magazine Picture Collage : Its Clinical Use and Validity as An Assessment Device.” The American Journal of Occupational Therapy, Vol.33, 1979, p.500 - 504
- 14) 森谷寛之 : 「コラージュ技法の導入方法」, 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂, 山中康裕編著 : 『コラージュ療法入門』 創元社, 1993, 5 - 14 項



## Abstract

To investigate one's emotional states and the expression in collage works, a multiple-sided emotional states scale was administered to 28 college students, and the task of making collage works was given, in two sessions.

The correlation between emotional states and the expression of collage works were analyzed in 7 cases in which emotional states were remarkably changed in two sessions.

The results were as follows : (1) The expressions in collage works may be changed to the same directions with one's emotional states. (2) The expressions in collage works may be changed to the opposite directions. (3) The expressions in collage works showed no correlation to one's emotional states.

One's emotional states tended to be reflected in the expression by the visual image, with the kind of emotion.